

## ウップサーラのリンネの花、リネア

ウップサーラ教会



スウェーデン・ティンメナッペン在住

藤倉・カールソン・篤子

ストックホルムから60km北にあるウップサーラに用事があったのを幸いにこの町の大聖堂を久しぶりに訪ねてきました。ウップサーラ大聖堂にはスウェーデンの歴史上で最も有名な王グスタフ・ヴァーサが眠っています。また、この大聖堂にはグスタフ・ヴァーサ王の他に生誕300年祭で今年注目の人、分類学の父と言われるリンネが眠っています。「リンネの墓石がまだリネアの花で飾られているよ」と聞いて、リネアの花がどうしても見たかったのです。リネアという植物は開花期間が大変短く森を這うように生息するらしいけれど、私は実際に見たことがなかったのです。1700年代に生きた博物学者リンネは自然界のあらゆるものを調査し、分類し体系付けてそれらにラテン語で学名を付けようという情熱を持っていました。人間の学名はホモ・サピエンスですが、我々「ヒト」を含めて体系の中で位置づける概念と仕組みを作った人です。リンネは生涯において沢山の美しい花々を観察したけれど故郷の森に咲くさりげない小さなこの花を一番愛し、後にvonという爵号を授かった時にも自分の紋にロゴとして使ったそうです。リンネに愛されリンネのように小さい（彼は154cmと小柄だった）この植物を彼の名に最も近い響きを持つ女性名「リネア」と名づけたのは友人であるオラン

ダの植物学者でした。リンネの墓石は彼の愛した沢山の小さな薄紫ピンク色のリネアたちに優しく見守られるように教会内の入口近くでひっそりしていました。リンネは世界中の自然界を体系付けるには人間の一生が短すぎるにも早くから気付いていました。当時としては71歳まで長生きをし、生涯で186もの論文を発表し、自分の学術的情熱と意思を継ぐ有能な学生たちを沢山育てました。自分の代わりに使徒たちと呼ぶ愛弟子たちを世界の果てへ調査探検の旅へと送り出し、リンネの研究精神を引き継がせました。

そのリンネの使徒たちの中でも最も優秀だった一人で、オランダの東インド会社の船に同行して鎖国をしていた江戸時代の日本に入国したスウェーデン人の植物学者がいます。植物の学名で「○・△・ジャポニカ」のように「日本」の名前が付いているものが大変多いのはこの植物学者カール・ペーテル・ツェンペリイが残した業績の一つによるものです。ツェンペリイが書き残した日本観察日誌によると、当時の日本政府に年2回出島への入国を許されていたオランダ船に乗るために「オランダ語を読み書きする人」になる努力を3年間したとあります。外国語の習得はツェンペリイさんでも大変だったんだ…と親近感を覚えます。ツェンペリイが1775年8月



リネアの花で飾られたカール・フォン・リンネの墓



リンネ生誕200年祭の様子(1907年)

に長崎港に入った後、日本の風俗や自然を観察し収録して作った世界最古の瑞日単語帳は面白い小説を読むようにワクワクします。当時日本にはオランダ語を理解できる日本人通訳が40-50人もいたそうです！ツェンペリイはオランダ語を使って日本語を学びながら日本の植物を調査研究し、1年5か月後には沢山の植物を記録・収集してヨーロッパに持ち帰りました。

ウップサーラ大学での100年前のリンネ生誕200年祭には「ニルスの冒険」を書き上げたばかりのセルマ女史が、そして今年の300年祭には天皇皇后両陛下が来瑞され式典にご出席されました。「両陛下と共に沢山の報道関係者が日本からやって来た…」とこちらの新聞は報道関係者の数にも驚いていたので、日本でも色々ニュースになったことでしょう。「リンネの精神」をキーワードに、新しい何かを見つけていこうという試みが2007年を通してあらゆる分野で工夫されています。